

5 小池の石造物

5-1 八千代市小池の庚申塔群と銘文に見る「通り名」

蕨 由美

はじめに

八千代市北西部の小池村には、元禄 11 年（1698）の「小池村指出し帳」（注 1）によれば、江戸時代前期、村高 139 石 2 斗で戸数は 32 軒、192 人の村民が暮らしていた。

中世から法華宗妙光寺があり、中山法華経寺の千部講 13 カ寺に属す日蓮宗地域の村である。

集落の西方の畑道沿いの字庚申裏に、庚申塚の基壇が築かれ、一列に 24 基の庚申塔が並ぶ姿は、特に壮観である。（図 1）

図 1 小池の庚申塔群



この庚申塔群について、『八千代市の歴史 資料編』の「石造文化財」一覧表（注 2）と、『よなもと今昔』10 号（注 3）を参考に、2024 年 2 月～5 月に、畠山隆・松柴慎吾・藤村誠枝・菅原賢男・青田博之・小林詔三・瀬川尚子・蕨由美会員で、特に人名に関する銘文に注目して調査し、その詳細を調査カードに記録した。

調査 No. は、庚申塔 24 基と線香立て 1 基、計 25 基を古い年銘順に番号を振った。なお、現地での並び方は、右から 4 番目までは、右端が No.18 の明治 42 年塔、次いで No.1 の元禄 5 年塔、No.3 の明和 2 年塔、No.2 の宝暦 9 年塔と並び順不同であるが、5 番目 No.4 からは No.15 の線香立てを除き、No.25 の平成 31 年塔まで年銘順に並んでいる。

本稿では、小池の庚申塔調査結果と、それをもとに小池村における江戸時代の「通り名」についての考察を報告する。

表1 小池の庚申塔 一覧表

No.	造立年月日	西暦	像容	形状	銘文 (人名は判読可のみ)
1	元禄 5・11・吉	1692	青面金剛・三猿	笠付角柱型	妙法蓮華經 奉待庚申講成弁小池村 本願主 [○] 左工門 (他 人名 15)
2	宝暦 9・12・吉	1759	青面金剛・邪鬼・三猿	笠付角柱型	妙法蓮華經 庚申塔 小池村講中 願主浅野半右工門 (他 人名 23)
3	明和 2・11・吉	1765	青面金剛・邪鬼・三猿	駒型	妙法 小池邑本願八郎左工門 庚申講中 十五人
4	天明 7・11・吉	1787	三猿 (台石)	山状角柱型	奉勸請积提桓因天王 願主講中 本願主 [□] 右工門 (他人名 15)
5	寛政 8・11・吉	1796	三猿 (台石)	駒型	大帝釈天王 (人名 26)
6	文化 4・2・吉	1807	三猿 (台石)	駒型	大帝釈天王 (人名 24)
7	文化 12・2・吉	1815	三猿 (台石)	駒型	大帝釈天王 (人名 23)
8	文政 5・正・吉	1822		駒型	大帝釈天王 講中 (人名 16)
9	天保 2・11・吉	1831	三猿 (台石)	駒型	大帝釈天王 願主 構中(人名 27)
10	天保 11・2・吉	1840	三猿 (台石)	駒型	大帝釈天王 奉寄進 ^{如来} 壹像大願成 [□] 當邑玉井運治郎 願主 (人名 20)
11	嘉永 4・11・上流	1851	三猿 (台石上段)	駒型	大帝釈天王 講中 (台下段) 願主 構中 (人名 22)
12	文久 2・2・庚申	1862	三猿 (台石)	駒型	大帝釈天王 講中 (人名 16)
13	明治 6・3・吉	1873	三猿 (台石)	駒型	庚申塔 願主 講中 寄進連名 (人名 34)
14	明治 13・4・吉	1880	三猿 (台石)	駒型	大帝釈天王 願主 講中(人名 26)
15	明治 16・6・吉	1883		線香立	奉納 玉井由行
16	明治 20・3	1887	三猿 (台石)	駒型	大帝釈天王 本願主 講中 (人名 30)
17	明治 32・3・吉	1899	三猿 (台石)	駒型	大帝釈天王 本願主 講中 (人名 21)
18	明治 42・11・吉	1909		駒型	庚申塔 講中 (人名 23)
19	大正 8・12・吉	1919		駒型	大帝釈天王 講中 本願主 願主 講中 (人名 28)
20	昭和 5・11	1930		駒型	大帝釈天王 講中 世話人 講中 (人名 29)
21	昭和 30・7	1955		駒型	庚申塔 講中 本願主 願主 講中 (人名 38)
22	平成 3・11	1991	三猿 (台石)	駒型	庚申塔 願主 講中 (人名 21)
23	平成 13・11・吉	2001		駒型	庚申塔 講中 願主 講中 (人名 24)
24	平成 22・12・吉	2010	三猿 (台石)	駒型	大帝釈天王 願主 講中(人名 21)
25	平成 31・3・吉	2019	三猿 (台石)	駒型	大帝釈天王 願主 講中(人名 11)

1. 小池の庚申塔の時代別特徴

(1) 江戸前～中期の3基の青面金剛像庚申塔

小池の庚申塔群は、元禄5年(1692)から平成31年(2019)まで327年間、連続と途切れることなく続けて24基建立されている(表1)、うち江戸時代前期～中期の3基は優れた像容の青面金剛像が浮彫りされている(図2)。他の21基は文字塔である。

No.1の元禄5年銘塔(図2左)は、笠付角柱型青面金剛像塔で、「妙法蓮華經 奉待庚申講成弁 小池村 本願口左門」の銘を持つ。

元禄5年銘塔は八千代市内庚申塔では10番目に古く、青面金剛像塔としては延宝元年(1673)銘の大和田新田の笠付角柱型塔と貞享2年(1685)銘の高津の駒型塔に次いで3番目に古い年銘をもつ。青面金剛像は一面六臂の合掌型で、三猿は正面向横一列に並び、ともにその像容と作風は、大和田新田と高津の青面金剛像塔に類似する。『市史』(注2)では「人名21」とあるが、風化が酷く銘が判明したのは16名にとどまった。

図2 青面金剛像庚申塔の画像



No.1 元禄5年

No.2 宝暦9年

No.3 明和2年

No.2の宝暦9年(1759)銘塔(図2中央)も笠付角柱型青面金剛像塔で、両側面に「妙法蓮華經 庚申塔 小池村講中 願主浅野半右エ門」と、他に24名の人名が彫ら

れている。

青面金剛像は一面六臂の剣持型で、足下の邪鬼の下に三猿が、中央が正面、左右が内側に横向きの三角形の構図で表現されている。これらの像容と構成は、真木野の寛延 3 年 (1750) 銘庚申塔と細部に至るまで類似し、正徳～明和 (1711～1771) 期の六十年間に柏～白井～印西～八千代市域などに 150 基以上集中して見られる画一的な特徴ある像容で、同一の石屋の制作により量産された青面金剛像塔と推定される (注 4)。

No.3 の明和 2 年 (1765) 銘塔 (図 2 右) は駒型で、勇壮な青面金剛像塔である。

像の上に「妙法」、左面に「小池邑本願八郎左エ門 庚申講中 十五人」の銘があるが、台石に人名連記はない。本願の「八郎左エ門」は、元禄 15 年の「小池村五人組帳」(注 1) で「組頭」として、また安永 3 年の「小池村組合取決め証文」(注 5) にも名があり、また No.14 の明治 6 年 (1873) の庚申塔にも「金子八郎左エ門」とその通り名が継続している。

青面金剛像の像容は六臂合掌型で、頭部は高い怒髪にとぐろを巻く蛇を頂き、憤怒顔の表情は迫力がある。引き締まった体躯はたくましく、右足は邪鬼の頭を踏み、左足を外に開く動的な表現には、均整もあり、石工の優れた造形力を見る。

このような雄渾な作風は、延享期から寛政期までの 18 世紀後半の特徴で、安永 3 年 (1774) の勝田村字馬橋の庚申塔 (注 6) や寛政 4 年 (1792) 高津村の習志野駐屯地内馬頭塚の庚申塔 (注 7) などに見られる特徴である。

また、同様な像容と構図は、船橋市金堀町庚申塚の延享元年 (1744) 銘塔や楠が山町庚申塚の宝暦 10 年 (1760) 銘塔の青面金剛像庚申塔 (注 8) があるが、小池の明和 2 年塔の作風が一番充実している。

(2) 江戸中～後期の「釈提桓因天王」「大帝釋天王」の文字銘庚申塔

No.4 の天明 7 年 (1787) 銘塔 (図 3 左) は、山伏角柱型文字塔で台石に三猿を彫る。

銘は「奉勸請釋提桓因天王／願主 講中」で、「本願人^治右エ門」ほか 15 名の人名がある。「釈提桓因天王」とは、仏教の守護神である帝釈天のことで、「釈提桓因天王」銘塔は、他に真木野の宝暦 14 年 (1764) と寛政 12 年 (1800) の 2 基 (注 9) と、船橋市の元禄 8 年 (1695) の三猿付「奉信敬釋提桓因天」銘庚申塔ほか 3 基 (注 10) の計 7 基があるのみで、天明 7 年以降はすべて「帝釈天」銘となる。

No.5 の寛政 8 年 (1796) 銘塔 (図 3 中央) から No.12 の文久 2 年 (1862) 銘塔までの 8 基は、江戸時代のすべて「大帝釋天王」銘の文字庚申塔である。

8 基とも駒型で日月と瑞雲の下に主尊「大帝釋天王」の銘をのびやかに大書している。

台石には、No.8 の文政 5 年 (1822) 塔を除いて三猿像を浮彫りし、願主・講中の 17～27 名の人名が刻まれ、No.10 の天保 11 年 (1840) 銘塔には、小さな文字で「奉寄進如来壹像大願成□ 當邑玉井運治郎」の銘がある。

図3 文字銘庚申塔の画像



台石の三猿像は江戸後期ごろから、写実的な動きの表現が見られ、特に、No.9の天保2年（1831）塔の三猿像は躍動感と滑稽味がある。（図4）

また8基の造立年の間隔は、7～11年、平均8年で安定している。

庚申講の主尊「帝釈天」の名が日蓮宗系の地域で知られるようになったのは、安永7年（1778）の庚申の日に柴又の題経寺で「帝釈天」という像が刻まれた板本尊が発見され、その霊験が江戸市中に広まってからといわれる。

この板本尊の像は、一般的な帝釈天像とは異なる特殊な像であるが、その画像は「高祖御真筆の板本尊」として刷られ、掛軸などで各地域の庚申塔で広く普及した（注11）。

題経寺式帝釈天像が刻まれた庚申塔は、松戸市紙敷の広隆寺の嘉永5年（1852）の像塔（注12）が県内では唯一で、他はすべて文字塔である。

図4 No.9の天保2年（1831）塔の三猿像



なお、八千代市内全域でも、寛政4年の高津村の青面金剛像庚申塔を最後に、ほぼ一斉に文字庚申塔となる。非日蓮宗地域の主尊銘は「青面金剛」・「青面金剛王」などで、文化期から「庚申」・「庚申塔」も現れ、文政期の主流となる。

(3) 近現代の庚申塔の特徴

近代は、No.13の明治6年(1873)銘塔(図3右)からNo.20の昭和5年(1930)銘塔まで7基の文字庚申塔が7~11年間隔で建てられ、またNo.15の明治16年(1883)銘の線香立て1基が造立されている。

形態は駒型、主尊銘はNo.13とNo.18の明治42年(1909)銘塔が「庚申塔」で、他の5基は「大帝釈天王」である。

明治維新後、大きく変化するのは台石の人名銘で、苗字を冠した「氏名」表記となる。伝統的な「通り名」も次第に新しい戸籍の氏名となっていくが、No.13の明治6年銘塔とNo.14の明治13年(1880)銘塔には、まだ通り名も多くみられる。

現代は、No.21の昭和30年(1955)銘塔から平成31年(2019)銘塔(図5右)まで5基が建てられている。造立間隔は、昭和期は2基と少なく、大戦をはさむ1930~1955年の25年間、1991年までの46年間造立が休止しているが、それを除くと、9~11年間隔である。

図5 近現代の文字塔



主尊銘は、戦後の昭和 30 年銘塔から平成 13 年（2001）銘塔までの 3 基は「庚申塔」であるが、平成 22 年（2010）銘塔と平成 31 年銘塔の 2 基は伝統的な「大帝釈天王」銘に復帰し、台石の三猿も大きくユーモラスな像になっている。

2010 年代以降の下総地域の庚申塔建立事例は珍しく、最新では、八千代市下高野で平成 26 年（2014）に角柱型文字庚申塔（注 13）が、船橋市鈴身町庚申塚で令和 3 年（2021）12 月に青面金剛像の庚申塔が建立されている（注 14）などに留まる。

なお、平成 3 年（1991）銘塔（図 5 中央）の建立に際して、庚申塚の基壇整備が行われた（注 3）ことが、基壇の右端のプレートに「奉納／一金壺拾万円也 資材費／当区五十嵐泰／施工 講中一同／平成三年十月吉日」の銘文が刻まれていることからわかる。

2. 小池の庚申塔に名を刻まれた人々

小池の庚申塔 24 基のうち、No.3 の明和 2 年銘塔が「本願八郎左エ門 庚申講中 十五人」とあるほかは、23 基のすべて講中の各メンバーの名が列記されている。その数は 23 基 537 人で、1 基平均 23 人の名が刻まれている。

表 2 庚申塔の人名銘文（判読不明は除外）

No.1 元禄 5 年	No.2 宝暦 9 年	No.4 天明 7 年	No.5 寛政 8 年	No.6 文化 4 年	No.7 文化 12 年	No.8 文政 5 年
□左門 市良兵衛 七郎兵衛 新兵衛 久兵衛 □□郎 長三郎 満藏 権兵衛 平太 □左門 文七 □十郎 新右門 長吉	浅野半右エ門 長三良 金藏 七良次 文次良 半七 権次良 長五良 七之丞 八右門 茂兵衛 清藏 山三良 庄次良 甚之丞 □四良 平四良 源六 彦七 源七 兵八	治右エ門 □右エ門 傳〔 〕 伴三郎 藤兵衛 喜〔 〕 半兵衛 治右エ門 八藏 文藏 傳四良 傳藏 □七 藤八 □右エ門 伴兵衛	□八 □エ門 庄七 久太良 豊七 七良エ門 長藏 栄藏 重 良 権太良 清二良 長太良 久〔 〕 傳〔 〕 茂七 □内 吉エ門 文七 佐七 □良 林藏	榮治 忠兵衛 勝五良 勝右エ門 金藏 善右エ門 甚五良 利七 久八 久右エ門 圓次 惣吉 長吉 吉兵衛 繫八 銀藏 定吉 左七 与惣吉 七左エ門 祐藏	榮治 寅藏 勝五良 忠兵エ 忠七 長左エ門 甚五良 利七 与市 惣治良 巳之助 長助 七良右エ門 津右エ門 五良兵衛 長吉 又治良 友七 糸治良 平藏 繫七	□惣治 亀治郎 定七 佐吉 太良吉 谷藏 □吉 榮治 茂八 運治 要藏 清藏 石□ 栄藏 仙治郎 利右エ門

	四平 八藏 喜三郎		□右工門 佐治□ 傳吉 祐工門 庄三良	仲右工門 清八 津右工門	与作 庄兵工	
--	-----------------	--	---------------------------------	--------------------	-----------	--

No.9 天保 2 年	No.10 天保 11 年	No.11 嘉永 4 年	No.12 文久 2 年	No.13 明治 6 年	No.14 明治 13 年
清藏 吉太郎 與市 常藏 惣治郎 幸助 林藏 常吉 幸右工門 彌七 秋藏 勝右工門 元七 恒七 金藏 米藏 治良右工門 音治郎 仙治郎 利右工門 浅治郎 万藏 石松 紋藏 清右工門 勇吉 留治郎	玉井運治郎 與助 林藏 和吉 重左工門 弥七 馬之助 半左工門 治助 源右工 吉藏 春藏 幸治郎 儀治 吉太郎 國藏 六左工門 豊吉 長吉 伊助 安右工門	惣左工門 新左工門 源右工門 七郎右工門 四郎右工門 安兵衛 八郎左工門 治郎右工門 庄兵衛 八兵衛 久左工門 久右工門 三四吉 仙之助 清兵衛 太郎兵衛 重左工門 与惣左工門 作左工門 柰五郎 為藏 仙藏	五□□ 市□□ 與□□門 治良右工門 新左工門 彖藏 與市 □五良 庄□助 勝五郎 忠五郎 留吉 □藏 治良吉 七兵工 □左工門	五十嵐久右工門 大久保五□兵工 小寫清兵工 玉井柰之助 村田忠兵工 露木仁助 石井庄之助 豊田熊藏 浅野万吉 浅野信藏 石井善藏 宇佐美治郎右工門 宇佐美源右工門 小寫柰五郎 玉井當吾 宇佐美作左工門 村田七右工門 石井四良右工門 玉井新左工門 金子藏助 村田長左工門 露木茂右工門 浅野勝五良 岩松治左工門 五十嵐久兵工 村田宗左工門 石井治兵工 金子八郎左工門 大久保五□ 浅野七左工門 五十嵐久左工門 石井半兵工 清吉 (床屋) 重兵工 (床屋)	石井四□ 玉井与□□ 村田竹松 宇佐美運次良 小寫松五藏 村田七藏 玉井龜松 豊田浪五良 浅野房吉 浅野孫□良 小寫貞吉 宇佐美仁助 大久保兵藏 五十嵐久藏 鈴木重兵工 露木仁助 石井四良左工門 村田忠兵工 露木茂右工門 岩松治左工門 玉井新左工門 石井治兵工 石井半兵工 五十嵐兼吉 大久保五郎兵工 浅野七左工門

No.16 明治 20 年	No.17 明治 32 年	No.18 明治 42 年	No.19 大正 8 年	No.20 昭和 5 年
玉井亀吉 〇〇義五〇 玉井〔 〕 浅野〔 〕 玉井〔 〕 露木〔 〕 玉井奎〇 宇佐美〇〇 石井〇〇 石井〇〇 宇佐美〇〇 小島〇〇 村田〇〇 村田元次郎 玉井〇〇助 小島〇〇 浅野〇〇 岩松〇蔵 〇〇〇助 大久保〇蔵 大久保重蔵 石井宇之助 村田角蔵 石井利吉 五十嵐仲蔵 金子房松 浅野信蔵 金子茂助 岩松源蔵 浅野猪之助	宇佐美仁助 石井利吉 玉井奎之助 金子〇助 村田〇蔵 岩松源〇 浅野久吉 村田竹松 金子房松 小嶋定吉 小嶋松五郎 石井善蔵 村田元治郎 石井卯之介 五十嵐兼吉 五十嵐元之助 浅野措之助 玉井源蔵 玉井愛之助 石井仙太郎 小嶋増五郎	石井〇〇 玉井〇〇 岩松〇郎 村田竹〇 小嶋〇〇 小嶋竹治郎 石井吉蔵 石井市太郎 五十嵐忠蔵 玉井〇〇〇 玉井愛之助 小島市〔大〕〇 宇佐美健〇〇 石井〇蔵 豊田〇〇 大久保〇太郎 露木周〔蔵〕 石井〇〇 浅野〇〇 露木〇〇 石井光平 五十嵐常〇 村田徳〇郎	石井新吉 豊田八平 小島利三郎 石井〔嘉〕吉 小島市太郎 宇佐美亮平 浅野茂二郎 金子〇環 浅野小太郎 五十嵐平八 村田〇七 玉井初太郎 〇〇禎助 五十嵐常吉 村田〔禮〕治郎 石井新吉 金子〔蔵〕 村田忠五郎 玉井 〇 〇〇松五郎 小島竹治郎 石井貞蔵 岩松〇〇 宇佐美繁次郎 露木周蔵 浅野 顕 〇久保佐太郎 村田竹〇	玉井昭 浅野顕 金子傳蔵 石井新吉 大久保佐太郎 宇佐美勝五郎 石井市蔵 豊田享作 小島利三郎 小島市太郎 宇佐美亮平 石井嘉吉 玉井松五郎 浅野幸祐 浅野慶三郎 浅野浪五郎 岩松市太郎 岩松次男 浅野浦治郎 露木 茂 石井近之助 村田喜七 村田惣重 石井貞輔 村田徳治郎 五十嵐寅之助 五十嵐喜一 金子勝登志 〔五〕十嵐半次郎

No.21 昭和 30 年	No.22 平成 3 年	No.23 平成 13 年	No.24 平成 22 年	No.25 平成 31 年
浅野武雄 大久保〔 〕 村田惣重 石井道之助 五十嵐寅之助 石井禎助	露木裕一 小島信一 石井勲 浅野一夫 浅野繁 五十嵐武男	岩松先治 大久保圭助 石井利和 小島壽郎 五十嵐照雄 小島信一	小島正夫 石井和重 浅野弘行 小島静雄 小島壽朗 浅野一夫	大久保正和 小島静雄 石井幸夫 浅野弘行 浅野慎一 岩松幸雄

宇佐美〔 〕	五十嵐照雄	小島正夫	浅野栄一	生田志法
小島〔定〕市	生田善進	玉井一雄	宇佐美幸一	村田新一
玉井英治	石井和重	故豊田克正	浅野秀樹	村田正夫
玉井新司	石井敏雄	浅野一夫	大久保晴雄	五十嵐浩一
岩松市太郎	石井利和	安田弘昭	大久保俊光	石井誠
玉井秀夫	岩松先治	浅野弘行	大久保正和	
浅野秀一	宇佐美茂	浅野栄一	村田正夫	
金子信一	大久保勝三	露木祐一	村田新一	
石井実	大久保圭助	浅野秀樹	石井敏雄	
小島清	金子幸司	石井和重	五十嵐照雄	
豊田〔己〕	小島壽郎	大久保晴雄	村田武夫	
小島〔久〕	玉井一雄	大久保勝三	石井幸夫	
浅野幸祐	豊田克正	村田正夫	石井利和	
石井眞藏	村田一朗	村田新一	五十嵐実	
浅野敏	安田弘助	故生田善進	五十嵐浩一	
浅野佐傳治		石井敏雄		
岩松〔温〕		村田武夫		
露木茂		石井幸夫		
大久保清藏				
村田新				
宇佐美〔平〕				
石井孝吉				
五十嵐平治郎				
石井庄之助				
五十嵐〔喜〕一				
金子〔勝〕登志				
玉井中				
小島〔治〕				
〔浅野〕弘男				
浅野浩				
〔露木〕光輝				
浅野幸助				

図6 台石の人名を調査中



これらの庚申塔のうち6基の人名を、江戸前期と中期の小池村文書史料に掲載されている50名(延62名)と、現在の住民の屋号のうち「通り名」が判明している31軒の屋号を一覧表(表3)にして、比較してみた。

表3 小池村の古文書*と庚申塔*銘文の「通り名」一覧

通り名	五人組帳		庚申塔*銘文						屋号*	苗字
	元禄15年	組合取決 め証文 安永3年	元禄 5年	宝暦 9年	文化 12年	嘉永 4年	明治 6年	明治 13年		
市兵衛	○	○								
市郎兵衛	○五人組頭		○							
勘四郎	○									
加左衛門		○								
久右衛門	○	○				○	○		○	五十嵐
久左衛門	○	○				○	○		○	五十嵐
久兵衛	○	○	○				○			五十嵐
金蔵		○与頭		○						
源右衛門						○	○			宇佐美
長左衛門		○			○		○		○	村田
源兵衛	○								○	村田
五郎兵衛				○			○	○	○	大久保
五郎左衛門		○							○	浅野
作左衛門	○	○				○	○		○	宇佐見
澤右衛門		○							○	浅野
次右衛門		○								
治左衛門		○					○	○	○	岩松
七右衛門	○						○	○		村田
七左衛門	○	○					○	○	○	浅野
七兵衛	○	○							○	小島
七郎右衛門	○	○		○		○			○	村田
七郎左衛門	○名主								○	浅野
七郎兵衛	○									
治兵衛	○	○					○	○		石井
重左衛門		○				○			○	浅野
庄兵衛				○		○			○	石井
四郎右衛門		○				○	○		○	石井
四郎左衛門	○五人組頭	○五人組						○	○	石井
次郎右衛門		○								
治郎右衛門						○	○			宇佐美
次郎兵衛	○								○	玉井
治郎兵衛		○								
新左衛門		○				○	○	○	○	玉井
新右衛門		○	○						○	露木
仁右衛門		○								
清三郎	○									
清兵衛	○					○	○		○	小島

惣左衛門		○				○	○		○	村田
太郎兵衛		○				○			○	大久保
忠兵衛					○		○	○	○	村田
忠右衛門		○								
八右衛門		○		○					○	金子
八兵衛	○五人組頭	○				○			○	豊田
八郎左衛門	○組頭	○				○	○		○	金子
半右衛門		○名主		○浅野						浅野
半兵衛	○						○	○		石井
半七		○								
文右衛門		○								
孫兵衛		○								
松五郎						○	○	○		小島
茂右衛門		○					○	○	○	露木
茂兵衛		○		○					○	宇佐美
安兵衛						○				
与惣左衛門	○組頭					○		○	○	玉井
与惣兵衛	○									
与八郎	○									
六左衛門		○							○	石井
人名総数	25	37	16	24	23	22	34	26	31	

*表3の注

- 1.小池村に関する古文書では、このほか、「元禄十一年(1698)小池村指出し帳」(注1)に、「七郎左衛門」(名主・淡次大明神社・第六天宮支配)、「六左衛門」(廿三夜宮支配)、「長左衛門」(雷大明神社支配)の3名の名がある
- 2.庚申塔は24基中、江戸前期・中期・後期・幕末期の人名が多数読取り可能な代表例4基と、明治初期の苗字(氏)が明記され通り名の名がまだ多く残っていた2基を選んだ。
- 3.屋号は、『よなもと今昔』10号(注3)の「小池の屋号・家配置図」と、露木文吾氏提供の「小池地区屋号リスト」2023年により、通称屋号のうち「通り名」を使用する屋号をリストアップした。他の通称屋号として「タマゴヤ・ミカド・タナカヤ」などがある。

なお、「通り名」とは、江戸時代の百姓は苗字(名字・氏・姓)の公称が禁じられていたため、「～左衛門、～右衛門、～左兵衛、～右兵衛」などの百官名を由来とする名前を家督相続により代々襲名し、その家を代表する家長が公に名乗った名前である。また、家長個人の名前であると同時に、家の名として苗字の代わりに「屋号」にするケースも多くあり、同姓が重複する旧村内では、現在も通称として使われている。

文書史料は「元禄十五年(1702)四月 小池村五人組帳」(注1)と「安永三年(1774)五月 小池村組合取決め証文」(注5)である。両文書の50名の名と一致する人名は、江戸前期の元禄5年銘塔では16名中3名のみで、幕末のNo.11の嘉永4年銘塔では22名中13名、近代のNo.13の明治6年銘塔では34名中19名、No.14の明治13年銘塔では26名中9名が一致し、また後者2基では氏名表記になっていて、これを現代の通

り名の屋号と苗字とを照合したところ、ほとんどが一致していた。

江戸中期の宝暦期から後期前半の文化期までの人名は、文書や屋号と一致するのはいずれも数名以内であり、「～衛門・～兵衛」が付く名は意外に少なく、「□七・□蔵・□吉・□助」などの通り名以外の名が多い。通り名を名乗るのは領主に差しだす公文書に限られていて通常の名は別であったのか、家長以外の名の村人が信仰行事に多数かかわっていたのか、家制度が一般の村人に確立した時期が意外に遅く幕末から近代であったのか、その理由の考察は今後の課題である。

3. 小池と八千代市内の日蓮宗系庚申塔

今回の調査では、過去の資料を参考にしてこれまで把握していなかった平成期の2基を加え、小池の庚申塔数は22基から24基となった。

その主尊別・像容別の内訳は表4の通りで、19基が題目と帝釈天・釈提桓因の主尊名を持つ日蓮宗系の庚申塔で、「庚申塔」銘のみの一般の庚申塔は5基であった。

表4 小池の庚申塔の主尊別・像容別の内訳

内訳	日蓮宗系主尊銘の庚申塔				「庚申」銘	総計
	題目	帝釈天	釈提桓因	小計		
青面金剛像	3	0	0	3	0	3
三猿像	0	12	1	13	2	15
像なし	0	3	0	3	3	6
計	3	15	1	19	5	24

表5 八千代市内の所在地別の庚申塔数と日蓮宗系庚申塔と年代（2024年8月改訂）

所在地	全数	日蓮宗系庚申塔	年銘（西暦）
小池 字庚申裏	24	19	1692～2019
真木野 字台	11	3	1750～1979
佐山 字新久	13	4	1710～1892
佐山 熱田神社	12	2	1767～1934
平戸 字道地	17	14	1682～1916
島田 字通原	18	13	1682～1932
島田台 長唱寺	12	3	1737～1946
神久保 字井戸作	6	3	1790～1908
神久保 字上谷津	5	3	1790～1885
計	118	64	1682～2019

したがって八千代市内の日蓮宗地域の庚申塔の総数は 118 基、うち主尊銘から日蓮宗系の庚申塔とする数は 64 基となり、『史談八千代』第 48 号の「真木野の庚申塔群と日蓮宗地域の庚申塔」の表 3 と表 4 を、本報告の表 5 と表 6 に改訂した。

表 6 八千代市内の日蓮宗地域の庚申塔（2024 年 8 月改訂）

内訳	日蓮宗系庚申塔の主尊銘				一般の庚申塔の主尊銘				計
	題目	帝釈天	釈提桓因	小計	庚申	猿田彦	不明	小計	
青面金剛像	4	2	0	6	2	0	2	4	10
三猿像	2	17	2	21	4	0	0	4	25
像なし	2	34	1	37	44	1	1	46	83
計	8	53	3	64	50	1	3	54	118

小池と隣接する真木野の庚申塔群の特徴の違いは、小池の基数が多いことは別として、江戸後期以降、真木野では万延元年の「帝釈天」銘塔 1 基を除く 7 基すべてが「庚申塔」銘で、日蓮宗の宗派性を帯びない庚申塔であるのに対して、小池では青面金剛像塔 3 基には題目が、また江戸時代の天明期以降のすべてが「帝釈天」銘であり、近代・現代でも「庚申塔」銘 4 基を除く 7 基が「帝釈天」銘で、一見して日蓮宗系と認識できる庚申塔群となっている。

このような「帝釈天」銘の庚申塔が多い傾向は、平戸と島田の庚申塔群、また船橋市内の日蓮宗地域の大神保・小野田町・小室町・車方町とも共通し、千部講 13 カ寺地域の伝統と結びつきを感じさせる。

おわりに

本調査を行ってみて感じた小池の庚申塔群の注目すべき重要な点は、次の通りである。

- ① 元禄 5 年（1692）から現代の平成 31 年（2019）まで 327 年間、連綿と途切れることなく続けて 24 基建立されていること。
- ② 青面金剛像塔・「釋提桓因天王」銘塔・「大帝釈天王」銘塔・「庚申塔」銘塔と推移し、日蓮宗系庚申塔の時代的変遷を代表する庚申塔がそろっていること。
- ③ 印旛地域の各時代の特徴を持つ優れた像容の青面金剛像塔が 3 基あること。
- ④ 当群最古の元禄 5 年塔は、千葉県内の日蓮宗系庚申塔の中でも青面金剛像塔として初発であること。
- ⑤ 願主や講中の連名銘と、古文書や現代の屋号と照合することにより、近世・近代の小池村の人々やその先祖が明らかになったこと。

ところで、小池の庚申塔は平成 31 年銘が最新であるが、その後、令和になってからも小池の庚申講は、続けられているのだろうか。令和 6 年（2024）8 月 27 日に、前年度と今年度の区長とそのご家族にお話をお聴きする懇談会でお尋ねしたところ、令和 2 年からコロナ禍で中断し、現段階での情報は得られなかった。

過去の庚申講については、平成 3 年（1991）の詳細な記録が『よなもと今昔』第 10 号（注 3）に掲載されている。当時、小池の庚申講は長寿会に入る前のダンナ衆 21 人で構成され、毎月 1 回土曜日、庚申の日にはこだわらずに公民館に集まり、家順の当番が「南無妙法蓮華経」の掛軸に茶菓子など供え、住職も含め礼拝の後、飲食懇談となる。

平成 3 年は、新庚申塔の建立も含め、散逸している庚申塔を一か所にまとめる造成工事が行われ、その様子の写真も掲載されている。工事は毎日曜ごとの奉仕で、その度に雨に降られて難航したが、完成した石建て供養の日は、紅白の餅も供え、住職による開眼供養の後、餅まきも行われたとのことである。

今ある壮観な庚申塔群の貴重な姿は、まさに平成 3 年の小池地区の皆さんのご努力による。

最後に、調査に際して、お世話になった小池地区の皆さま、古文書との照合にご指導いただいた当会の青田博之会員、当会の石造物グループ会員の諸氏に御礼申し上げます。

注・出典

- 1.『八千代市の歴史 資料編 近世Ⅰ』八千代市 1989 年
- 2.「石造文化財」『八千代市の歴史 資料編 近代現代Ⅲ 石造文化財』八千代市 2006 年
- 3.木原律子・早瀬黄己「一、睦地区の石造文化財①」「四、小池の信仰」『よなもと今昔』第 10 号 阿蘇郷土研究サークル 1992 年
- 4.石田年子「下総国印旛・相馬郡に屹立する首持型庚申と石屋 X」『千葉県立関宿博物館研究報告』第 28 号 2024 年
- 5.『八千代市の歴史 資料編 近世Ⅱ』八千代市 1994 年
- 6.蕨由美「ちば道を勝田の獅子舞を訪ねて」『史談八千代』第 15 号 1990 年
- 7.蕨由美「高津の自衛隊演習場内「馬頭塚」の石造物」『史談八千代』第 48 号 2023 年
- 8.大塚武彦『船橋の青面金剛王像 88』私家版 2011 年
- 9.蕨由美「真木野の庚申塔群と日蓮宗地域の庚申塔」『史談八千代』第 48 号 2023 年
- 10.『船橋市の石造文化財』船橋市 1984 年
- 11.綿谷翔太「柴又帝釈天の庚申信仰」『常民文化』第 38 号 成城大学大学院 2015 年
- 12.『松戸市石造物遺産』万葉舎 2017 年
- 13.蕨由美「下高野のムラの石造物」『史談八千代』第 43 号 2018 年
- 14.大塚武彦氏（房総石造文化財研究会会員）のご教示による